17. 高度に進行した白内障に対する超音波乳化吸引術の術後成績

獨協医科大学眼科学
中村恭子，松島博之，妹尾　正

【目的】高度に進行した白内障症例の超音波乳化吸引術後成績について検討した．

【対象と方法】平成 21 年 4 月～平成 22 年 3 月の間に当院で施行した，成熟白内障を含む Emery-Little の水晶体核硬度分類で grade 5 の白内障 16 例 20 眼（平均年齢 76.7 歳±13.3 歳）．術前視力は光覚弁～矯正 0.06 で眼底の透見は不能であった．手術は soft shell 法でトリパンブルーによる前嚢染色後に前嚢切開（CCC）を作成し，超音波乳化吸引術（アキュラス，アルコン）を施行した．術中・術後合併症，角膜内皮減少率，術後視力を評価した．

【結果】CCC 成功率は 95％であり，術中合併症として，後嚢破損が 3 眼で生じ 2 眼で嚢外摘出術にコンバートした．術後合併症として，一過性眼圧上昇 2 眼，後発白内障 1 眼生じ，20％以上の角膜内皮細胞減少が 4 眼にみられた．角膜内皮減少率は 17.7％だった．術後視力は全例で改善し，矯正視力 0.5 以上は 55％だった．視力改善不良例は視神経や網膜疾患を有している症例，認知症などにより視力検査困難な症例も含まれていた．

【結論】高度に進行した白内障でも超音波乳化吸引術により，良好な術後成績が得られる．術中の後嚢破損と術後角膜内皮細胞の減少が発生しやすいため，注意する必要がある．

19. 意識消失による自動車事故症例の検討

獨協医科大学 [1] 臨床研修センター [2] 救急医学
寶住　肇[1]，岩田健司[2]，松島久雄[2]，
小野一之[2]

【目的】近年，意識消失が原因の交通事故が多数発生しているが，重症度との関連は不明である．

そこで，当院救命救急センターに搬送された交通事故症例を検討した．

【方法】2011 年 4 月から 2012 年 7 月末まで当院救命救急センターに搬入された，四輪または二輪自動車運転中の事故症例，132 例を対象とした．

重症度の指標として AIS を使用した ISS を用いて評価した．

AIS Abbreviated Injury Scale

AIS は外傷の種類と解剖学的重症度をコードで表し，重症度を 6 段階で評価する．

ISS Injury Severity Score

AIS を基に多発外傷の重症度を評価するスコアで，損傷部位を 6 部位（頭頸部，顔面，胸部，腹部及び骨盤内臓器，四肢及び骨盤，体表）に分け各部位，最高の AIS 重症度スコアの中から，上位 3 つを抽出しそれぞれを二乗して合計した値で評価する．最大値は 75 点．ISS15 点以上は重症，もしくは重症化の可能性があるため，入院による治療や経過観察が必要とされる．

【結果】患者の年齢分布としては若年性と中高年の二層性に分かれた．事故による死亡率は若年であればあるほど高く，高齢であればあるほど高かった．

全症例 132 中，約 8 割が ISS0 ～ 9 点で，2 割が重症例であった．ISS と対象の年齢層に相関性は得られなかった．

全体の 8％である 6 人が，意識消失をきたしており，意識消失患者の内訳としては若年層，中高年層の 2 層性を示した．

意識消失患者の ISS 別割合としては 1 例を除き軽傷であった．

【結論】自動車事故患者は，若年及び高齢者に多く分布し，死亡率も年齢が低い，あるいは高いほど上昇する．全国的なデータとも同様であった．

今回，意識消失による事故と ISS の重症度は相関しなかったが，意識消失者の年齢においても，若年及び中高年に発生している事から，症例数が増加すれば重症度と相関する可能性がある．今後，意識消失の先行する事故を常に考えながら診療にあたる必要性があると示唆された．